

北海道の鳥類の昔と今、そして将来：減った鳥と増えた鳥

北海道大学大学院地球環境科学研究院 先崎理之

1. 豊富な鳥類相を誇る北海道

北海道ではこれまで470種類以上の鳥類の記録があります。これは日本産鳥類の80%以上に匹敵します。これらの中には、国内での分布や繁殖地、越冬地がほとんど北海道に限定される種類も数多く含まれます。例えば、ウミガラス、エトピリカ、タンチョウ（図1左）、シマフクロウ、エゾライチョウ、ヤマゲラ、シマアオジ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、ハシブトガラ、ギンザンマシコなどは国内では北海道のみに分布・繁殖しています。また、シロカモメ、コオリガモ、シノリガモ、オオワシ、ユキホオジロなどは冬季の北海道では比較的普通に観察できますが、国内他地域ではあまり見ることが出来ません。

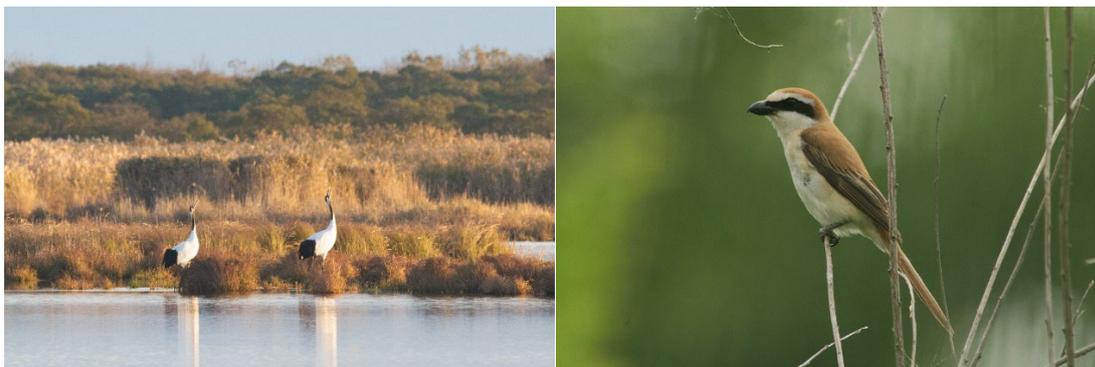


図1. 北海道の鳥・タンチョウ（左）と減少を続けるアカモズ（右）

さらに、本州以南では深い山地や高山地帯に行かなければ滅多にお目にかかれない鳥類が、都市公園や海岸近くから見られるのも北海道の大きな特徴です。例えば、私たちが勤務する北海道大学札幌キャンパスでごく普通に繁殖しているアカゲラやゴジュウカラは本州以南では山奥に行かなければ見られませんし、道東の海岸林で繁殖するルリビタキやコマドリは本州以南では森林限界付近の鳥類です。

海に目を向けても北海道の海鳥の豊富さは国内随一で、道北・日本海沖の天売島や道東・太平洋沖のユルリ・モユルリ島などで集団繁殖するウミネコ、オオセグロカモメ、ウミウ、ウトウ、ケイマフリなどに加えて、夏季には南半球から餌を求めてやってくるおびたしい数のハシボソミズナギドリやハイイロミズナギドリが、冬季にはアラスカやアリューシャン・千島列島方面から南下してくるシロエリオオハム、ミツユビカモメ、コウミスズメ、ハシブトウミガラスが大群をなして北海道を訪れます。

このように、本州以南とは異なる種類の鳥類が、しばしば桁違いの密度で生息している北海道は、まさに鳥類の王国とも言える場所なのです。

2. 減った鳥

このような豊富な鳥類相を誇る北海道ですが、国内外の他地域と同様に、過去数十年の間でも減ってしまった種や、逆によく見られるようになった種があり、その鳥類相には確実な変化が見られます。

減ってしまった種類の代表格として挙げられるのが渡り鳥のシマアオジです。シマアオジは、スズメほどの大きさの黄色い小鳥で、かつては全道の草原や湿原で夏になるとごく普通に見られました。本種は、国内の繁殖地がほとんど北海道に限られること、その美しい囀りから「草原のフルーツ」の異名を取ったことから、北海道を代表する小鳥としてバードウォッチャーには一番人気の種類でした。そのシマアオジの減少が各地で報告され始めたのは80年代の終わりから90年代に入った頃です。環境が変わっていないのに全道各地で渡来が途絶え始め、今世紀に入った頃には繁殖地が局所的になり、2012年にはかつての一大繁殖地だった勇払原野から最後の1羽が姿を消し、現在の繁殖地は道北の一地域を残すのみとなりました。それも渡来数の減少が続いており、危機的な状況です。減少の原因は長らく不明のままでしたが、2015年にドイツの研究チームが、中国沿岸での食用のための大規模な違法捕獲が、本種の生息地全域における急速な減少をもたらしたことを裏付ける論文を発表しました。

さらにもう1種、減少に歯止めがかからない種類があります。アカモズです（図1右）。本種もかつては全道の農地や低木林でごく普通に繁殖していましたが、各地で見られなくなってきています。私たちが2020年に発表した研究では、現在の国内の生息数は330個体ほどしか残されておらず、道内の生息地も大まかに3つの地域に限られることを示しました。これらの個体群は、今もなお減少を続けています。日本と大陸で同一の亜種が生息するシマアオジと異なり、日本のアカモズは大陸には生息していない固有亜種であることから、状況はシマアオジより深刻と言えるかもしれません。減少の原因はわかっていません。

海鳥では、多くの種類が分布の縮小と著しい個体数減少を経験しています。繁殖種では、ウミガラス、エトピリカといった国の絶滅危惧種に選定されている種類が、今やほとんど見られなくなってしまいました。さらに、ウミネコやオオセグロカモメといった普通の海鳥と思われていた種類が、近年は急速に数を減らしていることが私たちの研究からわかってきました（図2）。気候変動に伴う餌不足、混獲、外来・在来の捕食者の増加、繁殖地での人間の攪乱など様々な要因がこれらの減少に寄与していると考えられます。

非繁殖種の動態を詳細に報告した研究はまだほとんどありませんが、北海道に越冬に訪れるミツユビカモメやハシブトウミガラス、コウミスズメ、エトロフウミスズメなどのウミスズメ類やシノリガモ、コオリガモなどの海ガモ類が徐々に姿を消していることが指摘されています。ウミスズメ類については、2006年春に知床で見つかったように越冬地での油汚染による大量死や、繁殖地での餌不足による大量死が北海道での減少に関連している可能性があります、詳しくはわかっていません。

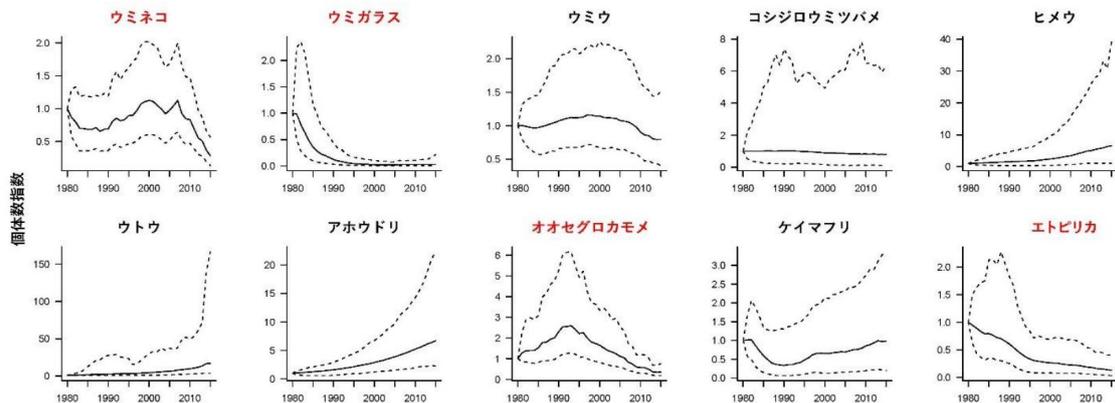


図 2. 1980 年の個体数を 1 としたときの国内で繁殖する海鳥 10 種の各年の個体数の比を示す。赤字が減少していた 4 種。これらは、道内が国内の主要繁殖地である。

3. 増えた鳥・新たに記録された鳥

このように、北海道では多くの鳥類が減少してきたことがわかります。一方、全ての種が減ってきたわけではありません。

中でも大型の水鳥の中には増加した種が目立ちます。例えば、一時は絶滅したと思われていたタンチョウは、給餌や繁殖地の保全などの成果によって順調に数が増え、分布域も拡大しています。近年では札幌近郊の長沼町での繁殖も話題になりました。

カワウは 90 年代の終わり頃から道内で目立つようになり、2000 年を過ぎたあたりからは繁殖が確認され始め、現在は全道各地で繁殖するに至っています。増加の原因はわかりませんが、本来の生息地である本州以南の個体群の近年の増加に伴い、北海道まで進出してきたのかもしれない。

北海道を渡りの時期に通過するガン類も大きく数を増やしています。これらはどれも北海道より北で繁殖し、主に本州以南で越冬します。例えば、マガンは天然記念物に指定された 70 年代には全国の渡来数が数千羽でしたが、現在は 20 万羽ほどに増加しています。道内でもかつては苫小牧市のウトナイ湖や美唄市の宮島沼周辺でしか大群は見られませんでした。近年は道北や十勝地方でも大群が観察されています。餌環境が繁殖地および越冬地の双方で改善したことが、この増加に関連していると考えら

れています。また、一時ほとんど渡来しなくなったシジュウカラガンは、民間団体がアメリカやロシアと協力して、かつての繁殖地への再導入を進めた結果として、近年の国内の越冬数が 5000 羽を超えるまでに回復しました。道内でも、20 年前にはマガン数万羽に数羽混じっていれば良い方でしたが、今や普通に見られるようになり、関係者の努力には頭が下がる思いです。

陸鳥でも大型の種の増加が見られます。オジロワシは繁殖数が増加しており、分布域も広がりました。本種は、かつての珍しい鳥から身近な鳥に昇格したといっても過言ではないでしょう。保護増殖事業が行われているシマフクロウは、入植前の分布域と個体数には遠く及ばないと考えられますが、個体数自体は過去数十年で僅かに増加しています。

小型の渡り鳥では、本州以南が分布の中心であるオオヨシキリの繁殖分布の北上が報告されています。また、レンカク、ベニバト、オウチュウ、ハイイロオウチュウ、ミヤマビタキといった本来は亜熱帯～熱帯に分布する鳥類が新たに北海道でも記録され始めています。気候変動の影響を受けて、北海道の鳥類の分布にも変化が生じているのかもしれない。

4. 北海道の鳥類のこれから

これまで見てきたように、北海道の鳥類は、種レベルでは減少した種や増加した種、新たに記録された種があり、これらには様々な要因が関係していると考えられました。一方で、近代以降の北海道への人間の入植と関連する開発行為は、群集レベルでは鳥類に大きなダメージを与えてきたことは間違いありません。例えば、1850 以降に石狩平野で起きた大規模な農地開拓は、平野全体の鳥類を約 210 万個体から約 60 万個体にまで減少させたと推定されています（図 3）。そして、現存する鳥類の多くは、僅かに残存する自然植生や耕作放棄などで植生が再生した土地に依存して生息していると考えられます。しかしながら、多くの鳥類の生息に寄与するこのような未利用地は、石狩平野に限らず全道・全国的に今でも未だに開発の脅威に最も晒された土地利用です。鳥類をはじめとする生物多様性保全を進めるためには、このような場所での開発はもうやめて、失われた自然の保全・再生活動に注力すべきなのかもしれません。

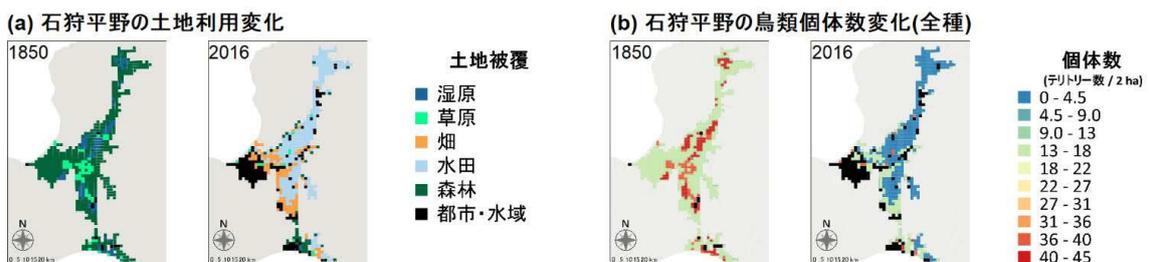


図 3. 過去 166 年間の石狩平野の土地利用の変化(左)と鳥類個体数の推定値の変化(右)